みつかる。つながる。よくなっていく。

毎月10日発行　第827号（通巻1331号）

東京YMCA

11
2025

創立1880年
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田２－３－18
日本キリスト教会館６階
Tel　03-6302-1960
URL　http://tokyo.ymca.or.jp
発行所　公益財団法人
東京ＹＭＣＡ
発行人　星野太郎

東京ＹＭＣＡの使命　東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

第39回 東京YMCAインターナショナル・チャリティーラン

障がいのある子どもたちの輝く未来のために

障がいのある子どもたちの支援と障がいへの社会的な関心を高めることを目的とした「インターナショナル・チャリティーラン」。今年度は「駅伝大会」とアプリを使った「ウォーキング大会」が同時開催され、その参加費や寄付など4,503,000円が東京ＹＭＣＡに寄付されました。駅伝大会の会場で寄せられた募金34,287円と合わせ、東京ＹＭＣＡが展開する「特別支援プログラム」（キャンプ、水泳教室など）の運営や支援者養成に活用します。
皆さまのご支援に心より感謝申し上げます。

気持ちが一つになる襷（たすき）リレー

ユニークな仮装で周囲を楽しませながらの力走

駅伝大会の開幕を飾った「こどもラン」

駅伝大会入賞チーム

1位　「社体保ランナーズ」東京ＹＭＣＡ社会体育・保育専門学校
2位　「室町ADEU１」上田八木短資株式会社
3位　「ランナーズ・ハイ」三菱商事株式会社

ウォーキング大会の詳細はこちら（入賞チームなど）

駅伝大会の詳細はこちら（入賞チーム、参加・協賛企業・団体など）

支援の思いを襷（たすき）でつないだ駅伝大会

9月27日、快晴の下、都立木場公園で「駅伝大会」が開催され、ランナー・ボランティア・応援者など約1,100人が集いました。

大会は、幼児と保護者・小学生が参加する「こどもラン」で幕を開け、続く開会式では、東京ＹＭＣＡインターナショナルスクールの生徒によるヒップホップダンスが披露されました。

駅伝レースは、一人約1・3kmのコースを6人で襷（たすき）をつないで6周する形式で行われ、優勝を目指すチームやユニークな衣装を披露するチームなど、43チーム276人のランナーと伴走者がそれぞれの特色を発揮しながら力走しました。まさに、チャリティーランのスローガン「LOVE ON THE RUN」の通り、走ることで愛をつなげる一日となりました。

ランナーも応援者も一丸となって盛り上がった大会。初参加の企業チームからは、「楽しかった。会社としての一体感が生まれ、チャリティーにも協力できて嬉しい」「これからも続けたい」との感想が寄せられました。また、障がい者と伴走者のペアランナーは、「たくさんの声援に元気をもらい、自然と笑顔になった」「二人で一緒につながって走る感じが最高だった」と笑顔で語りました。

大会を支えたのは協賛企業と、12の在京ワイズメンズクラブをはじめとする多くのボランティアです。ボランティアはそれぞれの持ち場で、大会のスムーズな運営に貢献しました。また、東京ＹＭＣＡの社会体育・保育専門学校、国際ホテル専門学校、医療福祉専門学校、にほんご学院の学生たちも役割を担い、会場全体が目的を一にして協力し合いました。

1987年に東京で始まったこの駅伝大会は、現在では全国21カ所のＹＭＣＡで開催されています。昨年からはパリ2024パラリンピック競技大会競泳メダリストの富田宇宙さんが全国大会委員長を務め、障がいのある子どもたちへの応援の輪を広げています。

上田晶平・東京大会実行委員長（左）から星野太郎総主事に贈られた支援金

視覚障がい者と伴走者が力を合わせてゴール！

医療福祉専門学校の学生による「パン・飲物引換所」ブース

オンラインのウォーキング大会が復活

コロナ禍に始まったオンラインのウォーキング大会が復活し、順位を競わず個人のペースで8日間歩く「らくらくウォーク」（9月20日～9月27日）と、チームの平均歩数で競う9日間の「チームレース」（9月27日～10月5日）が行われました。オンラインのウォーキング大会は、走れなくても参加できることや、遠くにいる仲間とチームを組んで参加できることが大きな魅力となり、参加者から好評です。海外の同僚とチームレースに参加した企業もありました。

「らくらくウォーク」には184人が参加し、合計15,254,106歩を達成。一日の平均歩数は11,809歩でした。「チームレース」には25チーム292人が参加し、合計28,806,368歩を達成。一人あたりの一日の平均歩数は11,151歩でした。

それぞれの場所で歩まれた一歩一歩が、障がいのある子どもたちへの思いを深め、支援の輪を広げる力となりました。

◆◆◆◆◆◆◆◆

駅伝大会とウォーキング大会を通じて、年齢や場所を越えて多くの人々が「支援の思い」でつながりました。東京ＹＭＣＡは、皆さまからの温かいご支援を力に、これからも障がいのある子どもたちを応援していきます。

（広報室）

赤▽三角

一人ひとりが自身について考え、他者との円滑なコミュニケーションや関係の築き方を考えることを目的にした東京ＹＭＣＡの正職員向けの初任者宿泊研修に、講師として参加した。自分自身について知ることは大切である。自分が何を大事に思い、何に興味を持ち、何が不得意なのか。さらには仲間との関係性の紡ぎ方にも、自分のあり方や価値観が表れる。▼研修では、年齢、性別、立場、役職にとらわれず、対等な関係を築くため「キャンプネーム」で呼び合った。これは、Googleの「プロジェクト・アリストテレス」研究で結論付けられた、生産性の高いチームに最も重要な「心理的安全性のある環境」、つまり、対人関係のリスクを恐れずに意見や質問を自由に発言できる環境に通じるものである。▼現代社会には、他者からの意見を否定的に受け取る傾向があるが、安心して意見を言い合える環境は生産性を上げ、一人ひとりの力を発揮できると信じている。ＹＭＣＡに集う人にとっての「みつかる・つながる・よくなっていく」場であり続けられるよう、ＹＭＣＡが「人を育てる団体」であることを心に抱きながら、日々真摯に向き合っていきたい。

（東雲児童館　ＡＤ　出沼一弥）

地域を彩り、豊かな生き方を共に創る

山手コミュニティーセンター

東京ＹＭＣＡ山手コミュニティーセンターでは、スイミング・語学・書道・ピアノなどの教室をはじめ、キャンプなどの野外活動、放課後等デイサービス、通信制高校のサポート校、国際ホテル専門学校、男子学生寮（山手学舎）など、多彩な事業を展開しています。ここに集う地域の皆さまや学生、生徒、ボランティアリーダー、ワイズメンズクラブのメンバーが安心して学び・交流できるよう、事業部を超えてスタッフ全員でセンターを運営しています。また、事業以外にも多くの方々の協力のもと、地域に根ざした取り組みを行っています。その中から、ホタル観賞会、日本語教室、やまてのまつりの３つの活動をご紹介します。（地域活動コーディネーター　大津桃子）

ＹＩＶ（Yamate International Volunteer）

笑顔が絶えず、交流の場としても貴重な日本語教室

「ＹＩＶ（イーブ）」は、ボランティアによる日本語教室です。外国籍の方が多い新宿区で、「仕事や学校帰りに日本語を学びたい」という声に応えるため、１９９０年代に山手センターの会員によって始められました。現在は月２回、木曜夜７時から開講しています。活動を支えるのは、10代から70代までの約20人のボランティア。日本語教師を目指す方や高校生などが、共に学び合いながら、国籍やジェンダーの垣根を越えて交流しています。

アジア諸国をはじめ、アメリカやイタリアなどさまざまな国籍の方が参加しており、学生だけではなく、ご夫婦での参加もあります。ある参加者は「今日、妻と一緒に初めて日本語教室に参加し、とてもうれしかったです。次の活動も楽しみにしています。」と日本語でメールを送ってくださいました。また、ボランティアからも「学ぶ人たちの熱意に元気をもらっています」「文化の違いを超えてお互いに理解し合える場です」との声が聞かれます。ＹＩＶは、誰もが安心して関われる多様なコミュニティーとして、地域に新しいつながりを生み出しています。

（野外教育　松本菜月）

さまざまな国籍の方が共に学ぶコミュニティー

ホタル観賞会

６月13日、山手センター利用者と地域住民を対象にホタル観賞会を実施しました。当日は来場者が３００人を超え、児童から高齢者まで幅広い世代の方々が初夏の夜を楽しみました。参加者の多くがホタルに触れるのは初めてで、そっと手のひらに包み込む姿が印象的でした。

本プログラムは小田原短期大学などとの協働で実施し、参加者の心理的変化の研究、日本文化の継承、環境理解、世代間交流を目的としています。運営は高等学院のスタッフと生徒（卒業生を含む）が中心となり、普段は他者との関わりに苦手意識をもつ生徒たちも、運営を通して多くの人と関わり、笑顔で応対する姿が見られました。地域の方から「こんなに間近でホタルを見られるとは思わなかった」「子どもと一緒に自然の大切さを感じられた」と好評の声が寄せられました。

また、このホタル観賞会の取り組みは、特定非営利活動法人キッズデザイン協議会主催「第19回キッズデザイン賞」（後援：経済産業省・内閣府・消費者庁・こども家庭庁）において、子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン部門（調査・研究カテゴリー）で受賞いたしました。

今後も未来を担う子どもたちを中心に、命の大切さや自然へのまなざしを育むとともに日本の歴史・文化・環境・異世代交流の理解と促進を目指し、世代間でそれらをつないでいく役割を果たしていきたいと思います。

（高等学院ＡＤ　上瀧徹也）

幻想的に舞うホタルの光

手のひらにそっとホタルを包み込む参加者

やまてのまつり
楽しみながら広がる地域の輪

毎年秋、山手コミュニティーセンターに集うプログラム参加者や生徒、そのご家族、地域の方々を対象に、交流と募金活動を目的とした「やまてのまつり」を開催しています。

今年は少し早めの10月５日に開催され、スタッフの他、リーダーやリーダーＯＢＯＧを中心としたボランティアなど62人が運営に参加し、14店舗が出店。近隣店舗や企業からの寄付物品販売をはじめ、国際ホテル専門学校の学生によるノンアルコールカクテルづくり体験、野外活動のリーダーによる子どもの広場、プログラム参加者が働く近隣作業所のお菓子販売など、山手コミュニティーセンターならではの特色あるブースが並び、朝から子どもたちを中心に多くの来館者で賑わいました。

毎年人気の抽選会は、開始直前までチケットを買い求める方で列ができ、熱気に包まれました。来場者からは「家族みんなで楽しめました」「リーダーに会えて嬉しかった」といった声が寄せられました。

また、抽選に外れて残念がる子どもに保護者が「この抽選券のお金は、困っている人のために使われるんだよ」と語りかける姿も見られ、このまつりの趣旨が地域に根付いていることを実感しました。

収益は能登半島地震被災者支援、ボランティアリーダー養成、ウクライナ避難民支援などの国際協力募金やフレンドシップファンドに活用されます。今年は40万円を超える収益を得られ、支援の割合は来場者による投票で決められました。「楽しみながら人と交わり、社会に少しでも貢献する」――やまてのまつりは、山手コミュニティーセンターに連なる人が一つになって取り組む、大きなイベントです。

山手コミュニティーセンターでは、地域の方々が活動を通して笑顔になり、やりがいや生きがいを感じられる場づくりを大切にしています。そこに集う人々の笑顔や小さな一言が、活動を支える力となり、次への一歩を生み出しています。人と人をつなぎ、その輪をさらに広げていくことで、地域全体が支え合う社会を目指していけるようこれからも地域とともに歩み続けてまいります。

（健康教育　宮田　諭）

オープン前に円陣を組んで気合を入れるボランティアリーダーとスタッフ

国際ホテル専門学校の学生による「ちびっ子バーテンダー体験」

「やまてのまつり」を運営したボランティアとスタッフ

大盛況の「抽選会」

来場者による「やまてのまつり」収益の支援先投票

「やってみたい」「できた」が叶う場に

―ユニバーサルフェスタ開催―

「車椅子の子どもも、クライミングを楽しめないだろうか」山中湖センター職員のそんな思いから生まれたのが、「ユニバーサルフェスタ」です。障がいの有無や年齢、性別、国籍などにかかわらず、すべての人の「やってみたい」という気持ちに応え、楽しく安心して過ごせる場をつくることを目的としています。

10月4日、山中湖センターにて開催され、参加者とスタッフあわせて55人が集まりました。クライミング、アーチェリー、ビッグカヌーなどのアクティビティを通して、達成感や楽しさを分かち合う一日となりました。

アクティビティを通して初めて会った人とも笑顔に

開催にあたって、さまざまな協働がありました。事前には日本肢体不自由児協会の協力で、車椅子利用者の家族や「手足の不自由な子どものキャンプ」のボランティアリーダーと山中湖センターの職員がクライミング研修を実施。補助の仕方や支える位置を何度も試しながら工夫を重ねました。足が地面を離れた瞬間に見せた子どもの笑顔、そして「クライミングをやってみたかったんだ！」という言葉。その一言が職員の心を強く動かし、このイベントを実現したいという思いを一層強めました。

当日は山梨学院大学のスポーツ専門演習Ⅳ（谷口ゼミ）の学生らが運営に参加。さらにパラクライマーの平井亮太選手をはじめ、株式会社サンドストーン、日本パラクライミング協会、甲斐モンキー、やまなしパラクライミングセンターなど、多くの方々が駆けつけ、イベントを盛り上げました。

多くの方の協力で実施が叶ったクライミング

雨の中での開催となりましたが参加者の表情は明るく、ある保護者は「子どもがクライミングで一番上までいけた！と目を輝かせていました。車椅子ユーザーなので、できたことがびっくり。またやりたいです。」と話しました。「やってみたい」という思いが叶い、「できた！」を実感できること――それは誰にとっても変わらない喜びです。ユニバーサルフェスタでは、参加者の「できた！」からの笑顔がたくさん見られました。

イベントのハイライトは、平井亮太選手によるクライミングパフォーマンス。腕の力だけで5・56メートルの壁を軽やかに登り、十数秒で到達した瞬間には、会場から大きな歓声と拍手が沸き起こりました。トークでは、27歳で発症した難病により車椅子生活となった苦悩、クライミングとの出会いによる気持ちの変化、変えられないことを受け入れ、変えられることに一歩を踏み出す大切さを語りました。

参加者へ熱く語る平井選手

「その一歩から、あの頃は想像もしなかった今がつくれている」と平井選手。2020年からパラクライミング競技をスタートし、2023年には世界選手権に日本代表として出場しました。「何か一歩チャレンジしてみたら、信じられないような未来が待っているかもしれない。チャレンジを迷う人たち、やってみようかなと思っている人たちの後押しができるような登りができる選手になりたい」という言葉で結びました。

山中湖センターは、1923年に日本で最初の常設型キャンプ場として誕生し、「精神・知性・身体の調和のとれた全人教育」を実践してきました。1980年の東京YMCA創立100周年には「障がい児と健常児が共に活動できる野外センターに改善する」という目標が掲げられ、トイレや浴室への手すり設置、通路の段差解消など、ユニバーサルデザインの施設づくりを進めてきました。現在もなお、誰もが安心して過ごせるキャンプ場として進化を続けています。

それぞれの挑戦や楽しさを見つけた一日でした

ユニバーサルフェスタでは、さまざまな背景の人たちがともに同じ体験をし、笑顔で話すひとときがありました。互いを理解し、同じ体験を分かち合うことが、分断のない社会を築く一歩になると信じています。誰もが安心して生きられる社会を目指して、東京YMCAはこれからも、違いを受け入れ、尊重し合い、安心して過ごせる場をつくっていきます。

（広報室）

野の花、空の鳥

東京YMCA総主事　星野 太郎

今、問われているもの

海外YMCAから多くの隣人をお招きし、共に学び交流を深める行事が目白押しの11月。米国フロストバレーYMCA、ソウルYMCA、台北YMCAと来訪が続きます。戦後80年の今年、これらの行事は単なる交わりに留まらず、平和な世界を実現するために、違いや国境を越えて互いの連帯を確認する大切な機会にしたいと思っています。

夏に山中湖で実施した「外国にルーツのある子どもたちのキャンプ」の参加者は、アジア地域をはじめとする11の国にルーツのある子どもたち29人でした。その申込者の中に、出入国在留管理庁（入管）による仮放免の状態で暮らす子どもがいました。ユースボランティアと準備を進める中で、日常生活や教育機会、そして周囲の目において、不自由で不安定な毎日を強いられているこうした子どもたちのことを知り、痛みとともに現実を学ぶ機会になりました。

「私たち日本のYMCAは、一人ひとりの人権を守り、正義と公正を求め、喜びを共にし痛みをわかちあう社会をめざします」日本YMCA基本原則にはこう記されています。さらに、「アジア・太平洋地域の人びとへの歴史的責任を認識しつつ、世界の人びとと共に平和の実現に努めます」と続きます。一人ひとりとは誰のことか。共にとは誰と共にか。そして平和の実現とは何を指すのか。私たちの働きは、日々このような問いに向き合うことなのだと改めて思います。

新しい首相が決まりました。日本が行った侵略戦争の過ちを正当化、美化、修正する思想が広まることのないよう心から願っています。今を再び「戦前」にしないように、「外国人」をヘイトし排斥する社会に向かわないように、私たちは変わることなく「共に生きる社会」を活動や地域での働きに表していきたいと決意を新たにしています。今、私たちに問われているのは、この歩みを続ける強い意志です。

東京⇄NY　フロストバレー便り

最近、ネットで海外から商品を購入し到着を心待ちにしていたところ、宅配業者から100ドル近くの追加請求があり、課税が理由だと判明した。日本に住む姉から、アメリカに荷物を送れなくなったと連絡があったことを思い出した。日本郵便のウェブサイトに「米国政府による全ての国に対する免税措置の停止」と題する米国宛て郵便物に対する大統領令についての記載があり、混乱している様子が伺えた。米国への渡航に必要なESTA（電子渡航認証）もこの秋に値上げ、また米国企業が外国人技術者を採用する際に利用するH1Bビザの申請料は10万ドル（約1,500万円）に値上げするとの報道があり、極端な政策に驚きが広がっている。

物価高に加え、外国人への規制も厳しい。先日、ＮＹ総領事館より在米邦人宛てに「米国法令の遵守について」と題したメールを受け取った。法令違反行為（滞在資格外活動や飲酒運転等）を行った場合のリスク（多額の罰金や国外退去）が書かれ、注意喚起を促す内容であった。日本のニュースでも報道されている通り、移民への取り締まりは身近なところでも感じる。

この夏もサマーキャンプに日本から３人のリーダーが参加し活躍した。研修ビザは滞りなく取得することができたが、6月には米国大使館のビザ取得面接がストップするなど、手続きがあと１週間遅れていたら、渡米が大幅に遅れる事態になるところであった。フロストバレーＹＭＣＡは毎夏100人を超えるインターナショナルスタッフを採用する。オリエンテーションでは、一人ひとりにカードが渡され、カードには合法に滞在していることの説明や人事部の連絡先が記載されている。合法的に米国に滞在をしていても誤認の摘発があるため、キャンプ場外に出るときは必ず携帯するように説明がある。以前では考えられない状況が日常化している。

そのような時代でも、フロストバレーＹＭＣＡは誰もが参加できるように努力を惜しまない。物価高の中にあっても、参加費を４段階に分け、それぞれの家庭の事情に合わせて参加費を支払うことができる。またウェブサイトの多言語表記、ハンドブックなどはスペイン語表記を用意するなど、誰もが安心して参加できるように取り組んでいる。

この夏も日本に縁や興味関心のある子どもたち227人が、差別や偏見の話題が届かない大自然の中で心地よい時間を過ごした。遠く離れたこの場所でも、東京ＹＭＣＡのミッションである「公正で平和な世界を作るための運動」が展開されている。

（東京–フロストバレーＹＭＣＡパートナーシップ　星住秀一）

INFORMATION

■早天祈祷会（12月）■

会員有志が聖書について自分の考えなどを語る「奨励」の後、皆で祈り讃美歌を歌います。クリスチャンでない方もお気軽にどうぞ。

日　時：2025年12月1日（月）
　　7：00～8：00
奨励者：山北宣久牧師
　　（日本キリスト教団田園調布教会）
会　場：山手センター／オンライン
問合せ：会員部（03-6278-9071）

●●●会員のご案内●●●

「会員」とは、東京ＹＭＣＡの主旨に賛同し、会費によって活動を支えてくださる方のことです。ＹＭＣＡは、青少年の健全な成長をサポートし、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるために、より多くの会員と共に活動していけることを願っています。

詳細はこちら

クリスマスオープンハウスのご案内

子どもたちを取り巻く社会をより良くしていくために、ワイズメンズクラブをはじめ、地域の方々のご協力により開催いたします。ご来場をお待ちしております。

【日時】2025年12月14日（日）　10：30～15：30
【会場】東京ＹＭＣＡ東陽町センター

【内容】バザー、模擬店、国際喫茶、子どもゲームコーナー、スマホ相談会、おもちゃ病院、吹き矢コーナー、近隣小学校絵画展、ゴスペルコンサート、防災コーナー、ラッフル抽選会　他

バザー献品のお願い

日用品、贈答品、食料品（生鮮食品以外）、文具、靴・かばん、おもちゃなど、献品のご協力をお願いいたします。
＊新品・消費期限の切れていないもののみでお願いします。
＊古着や古本の取り扱いはしておりません。
【受付期間】2025年11月１日（土）～12月11日（木）
【お問合せ】東陽町コミュニティーセンター
　　（03－3615－5565）

詳細はこちら

ワイズコーナー　Vol.32

Y'S MEN'S CLUB

世界につながるワイズメンズクラブ（5）

在京12クラブの結束がさらに大きな力に！

ワイズメンズクラブは、ＹＭＣＡをサポートする団体です。一般社団法人として奉仕活動をしています。「ワイズメンズクラブ」というと「Wise Men 賢人会」と思われそうですが、そうではなくて、「Y's Men」つまり「ＹＭＣＡのための」クラブです。

東京には12のクラブがありますが、3つの部（関東東部、東新部、あずさ部）に分かれています。

関東東部には、東京江東1959（数字は設立年：以下同）、東京グリーン1973、東京ひがし1988、東新部には、東京1931、東京むかで1961、東京町田コスモス1996、東京多摩スマイル2016、あずさ部には、東京西1976、東京武蔵野多摩1983、東京サンライズ1989、東京八王子1994、東京たんぽぽ2002。会員数は現在、関東東部54人、東新部51人、あずさ部47人です。

いままでは、部ごとに東京ＹＭＣＡを支援してきましたが、これからは、在京12クラブが協同して支援すれば、さらに強力な支援ができるのではないかと考え、今年の6月に「在京12クラブ会」を試験的に立ち上げました。在京クラブ会長会の幹事2人が音頭を取り、毎月オンライン（Zoom）で開催することにしました。少しずつ成果を上げることによって、「在京12クラブ会」はさらに大きな力になれると期待しています。「第39回東京ＹＭＣＡインターナショナル・チャリティーラン」では、在京12クラブ全てでの支援ができました。

在京クラブ会長会幹事：小原史奈子（東京たんぽぽＹサービスクラブ）、伊藤幾夫（東京多摩スマイルワイズメンズクラブ）

企業の力を子どもたちの学びに
～未来のキャッシュレス社会体験～

東京ＹＭＣＡ賛助会では、企業の特性を生かした社会貢献の場をＹＭＣＡが提供できないか模索しています。８月21日、港区芝浦学童クラブ（東京ＹＭＣＡ運営委託事業）で、オランダ資本のカード決済・データ・財務管理会社Adyen Japan（アディエンジャパン）株式会社によるワークショップが行われました。

参加したのは、Adyen Japanの社員ボランティア16人、芝浦学童クラブの小学４～６年生31人とスタッフ８人。子どもたちがカード決済のしくみや安全な使い方を学んだほか、未来のキャッシュレス社会を想定して、消費者・販売店・サポート企業スタッフの役割を模擬体験しました。また、模擬カードに事前に設定された1,500円分ぴったりの買い物をした「ピタリ賞」も出て、盛り上がりました。子どもたちからは「カード残高が確認できることがわかった」「買い物にはサポートする人がいることを知った」との感想があり、Adyen Japanのスタッフからは「お金は正しく使ってほしい」とのメッセージが伝えられました。

カード決済の体験

ワークショップを実施したアディエンジャパンの社員ボランティア、芝浦学童クラブと賛助会事務局のスタッフ

東京ＹＭＣＡには、多くの未来を担う子どもたちが関わっています。賛助会では、さまざまな企業からのリクエストもお待ちしています。

（賛助会事務局長　口原恵美子）

東京ＹＭＣＡメルマガ登録募集中

東京ＹＭＣＡのプログラムやボランティアなどの情報をお届けします。月1～2回の不定期配信。

登録はこちら

東京YMCA公式SNS

Instagram　https://www.instagram.com/tokyoymca/
x（旧Twitter）　https://x.com/Tokyo_YMCA
Facebook　https://www.facebook.com/tokyoymca

高尾の森 わくわくビレッジ Takaonomori Wakuwaku Village

「僕たちのキャンプ～楽しもう編～」

小学3年生～6年生を対象とした、1泊2日のキャンプを開催します。「僕たちのキャンプ」最大の特徴は、中高生のジュニアリーダーがいることです。ジュニアリーダーたちが、わくわくビレッジのスタッフやボランティアリーダーと一緒に、たくさんの楽しい企画を準備してみんなの参加を待っています！

日　程	3月7日（土）～8日（日）
対　象	小学3年生～6年生
定　員	20名※応募者多数の場合は抽選
参加費	5,940円（税込）
申　込	12月1日（月）～1月12日（月祝）※当日消印有効。

応募方法

往復はがきに郵便番号、住所、参加者氏名（ふりがな）、年齢（学年）・性別・電話番号を記入の上、高尾の森わくわくビレッジ「僕たちのキャンプ～楽しもう編～」係までお送りください。

詳しくはお電話またはフロントにてご確認ください
高尾の森 わくわくビレッジ　☎042-652-0911　〒193-0821　八王子市川町55　www.wakuwaku-village.com　高尾の森わくわくビレッジはYMCAスタッフが運営しています